

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 日本語学習者縦断作文コーパスに見るヴォイス使用上の困難点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2026-01-23 キーワード (Ja): 『W-CoLeJa』, 受身, 使役, 中国語話者, ベトナム語話者 キーワード (En): W-CoLeJa, passive, causative, Chinese speakers, Vietnamese speakers 作成者: 呉, 丹 メールアドレス: 所属: 東京都立大学
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000603">https://doi.org/10.15084/0002000603</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



# 日本語学習者縦断作文コーパスに見るヴォイス使用上の困難点

呉 丹

東京都立大学／国立国語研究所 共同研究員

## 要旨

本研究では、『日本語学習者縦断作文コーパス (W-CoLeJa)』から、大学入学時から卒業時までの4年間にわたって収集した12回の作文データを用い、中国語話者とベトナム語話者を対象に、ヴォイスの使用実態と習得過程を分析、考察した。その結果、次のことがわかった。まず、使用実態に関しては、中国語話者は母語の影響を受け、特に初級段階で、受身を使うべき箇所が無情物主語他動詞文を使う傾向が見られた。また、ベトナム語話者に見られない特殊な「(ら) れできる／(ら) れられる」と「(さ) せできる」の形式が観察された。一方、ベトナム語話者においては、初級段階から使役の過剰使用や、「させる」形と「させてくれる」形の混同といった特徴が見られた。また、受身の使用に関する縦断的発達を見ると、中国語話者とベトナム語話者は異なる習得過程を経て、受身の使用を身につけている可能性が高いことがわかった\*。

キーワード：『W-CoLeJa』、受身、使役、中国語話者、ベトナム語話者

## 1. はじめに

受身と使役を含めたヴォイス表現<sup>1</sup>は、形態や文構造、用法などの複雑さ、学習者の母語の影響、また、日本語教材での説明不足から、習得が難しいとされている。特に、学習者が日本語習得過程において、それぞれの段階でどのような具体的な問題を抱えているのかについては、まだ明らかにされていないのが現状である。そこで、本研究では、同一の学習者を追跡した学習者縦断作文コーパスを用い、受身と使役、使役受身の3形式を対象に、中国語母語の学習者がどのような困難点に直面しているのか、ベトナム語話者との比較を通して、学習者のヴォイス表現における使用実態と習得過程を明らかにする。

## 2. 先行研究の概観と本研究の位置づけ

受身と使役、使役受身の3形式を含むヴォイス表現に関しては、これまで数多くの対照研究および習得研究が行われてきた。まず、対照研究の観点からは、日英、日中、日韓の対照分析を行っ

\* 本稿はNINJAL国際シンポジウム「中国語話者のための学習者コーパスを用いた作文の研究と教育」(2024年9月15日於北京語言大学)のパネルセッションで行った発表をもとに作成したものである。本研究はJSPS 科研費JP21H04417、および、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」(プロジェクトリーダー：石黒圭)の研究成果である。本研究の遂行にあたり、国立国語研究所の上記プロジェクトのスタッフ各位、調査協力校の教員・学習者のみなさまのご協力を得た。記して感謝申し上げます。

<sup>1</sup> 後に本稿でヴォイスとして扱う形式について詳しく述べる。いわゆる「自他動詞」や「授受表現」などの文法項目もヴォイスの範疇に含まれるが、これらについては別の稿で論じることとし、本稿では使役、受身、使役受身の3形式のみ扱うことを断っておく。

た Soga (1970), 楊 (1989), 安藤 (1994), 許 (2004), 中島 (2007) が挙げられる。

一方、習得研究においては、上級学習者の誤用を考察した望月 (2009), 言語転移の影響を検討した金 (2013), Focus on Form を取り入れた教授法を提案する Lee (2015), 学習者の中間言語に着目した外崎 (2016), および視点の概念に基づき分析を行った田中 (1996, 1997), Tanaka (2005) などがある。

上記のように、ヴォイスに関する研究は、対照研究および習得研究の両面から盛んに行われてきた。しかし、学習者の習得過程をより包括的に解明するためには、縦断的観点からの研究も不可欠である。この点に関しては、森 (2006) や張 (2015), 李 (2018), 杉村 (2019), 何 (2022) など、限られた研究しか存在していない。

張 (2015) は初級から上級の中国語話者に対してアンケート調査を用いて考察している。中国語話者は、受身の構文に関しては、「直接受動：ひと」から、「間接受動：持ち主」, 「直接受動：もの」, 「間接受動：不利益」の順に習得していき、受身の機能に関しては、「動作主の脱焦点化」の機能から、「受影性の表示」, 「視点の統一」の順に習得していくことが指摘されている。張 (2015) は縦断的に中国語話者の受身の使用実態を考察している点で先駆的な研究であるが、文法性判断テストや文生成テストなどの質問紙による調査法であるため、学習者の自然な使用実態を把握しているとは言いがたい。

また、杉村 (2019) は、縦断的にデータを収集し、学習者の受身文の習得における困難点を明らかにした優れた研究であるが、経年的変化についての言及は乏しい。

何 (2022) では中級と上級の中国語話者の作文データを用い、受身の使用実態を考察している。その結果、「直接受影型」「事態実現型」「習慣的社会活動型」「状態型」のタイプの受身の使用は習熟度とともに変化する、「視点の一貫性機能」と非情主語受身文の「動作主背景化機能」のタイプの受身においては誤用と非用が顕著である、と指摘している。何 (2022) の一連の指摘は重要であるが、初級学習者までは十分に考察できておらず、学習者の経年的変化を部分的にしか捉えられていない点が惜まれる。そして、上記の研究はいずれも受身を中心に考察されており、使役や使役受身については対象外である。

上記の3つの研究は、中国語話者の学習者における受身の使用実態を一定程度明らかにしている。しかし、いずれも対象を中国語話者に限定しており、他言語を母語とする学習者の使用実態や習得過程については十分に検討されておらず、この点が課題として残されている。他言語母語の学習者の習得状況と比較し、相違点および類似点を明らかにすることで初めて、学習者一般に共通する特徴と、母語による影響を受ける特徴をそれぞれ特定することが可能となると考えられる。

したがって、本研究では、複数の母語を有する日本語学習者の縦断コーパスを用いることで、日本語学習者におけるヴォイス習得の過程を検証し、これまで指摘されてこなかった課題を明らかにすることを目的とする。さらに、本研究の成果は、日本語教育に携わる教員や学習者にとって、ヴォイス習得における困難点を示す有益な資料となることが期待される。

なお、本研究では、ヴォイスの広範なカテゴリーのうち、使役「させる」、受身「られる」、お

よび使役受身「させられる」を狭い意味でのヴォイスと呼び、この3形式における学習者の使用実態と習得過程を考察する。

### 3. 研究方法

#### 3.1 使用データ

上述の学術的背景を踏まえ、中国語話者のヴォイス表現が大学4年間でどのような変化を見せ、経年的にどのような習得過程をたどるのかを明らかにするため、国立国語研究所共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」のサブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」で収集された作文データの中から、中国語話者とベトナム語話者の作文、それぞれ288本を本研究の研究対象とする。本節では、本プロジェクトにおける作文の収集について簡単に説明する。

本作文プロジェクトは、海外の大学の日本語学科で日本語を学ぶ学習者が大学4年間に執筆した作文を収集し、学習者がどのように日本語を習得していくかを明らかにするものである。学習者の多くは、大学入学後に日本語の学習を開始している。

調査協力校は、中国語（簡体字）圏8大学、中国語（繁体字）圏2大学、ベトナム語圏3大学、韓国語圏2大学、タイ語圏2大学、英語圏1大学、フランス語圏1大学、スロベニア語圏1大学の計20大学である。

このうち、Aテーマの作文を執筆する大学とBテーマの作文を執筆する大学があり、学習者は年に3回作文を執筆する。大学4年間で、同じ作文テーマを4回繰り返し執筆する。このように収集した作文を用いることで、母語の異なる学習者の習得状況を横断的に考察できるだけでなく、学習者の4年間にわたる習得過程を縦断的に考察することも可能となる。次の表1に、作文のテーマと文字数の目安を示す。

表1 作文テーマと文字数の目安

調査回	Aテーマ	Bテーマ	ジャンル	文字数
第1回	うれしかったプレゼント	思い出の旅	体験文	200字以上、目安400字
第2回	私の好きな有名人	行きつけの店	説明文	
第3回	写真と動画	過去と未来	意見文	
第4回	うれしかったプレゼント	思い出の旅	体験文	400字以上、目安800字
第5回	私の好きな有名人	行きつけの店	説明文	
第6回	写真と動画	過去と未来	意見文	
第7回	うれしかったプレゼント	思い出の旅	体験文	600字以上、目安1200字
第8回	私の好きな有名人	行きつけの店	説明文	
第9回	写真と動画	過去と未来	意見文	
第10回	うれしかったプレゼント	思い出の旅	体験文	600字以上、目安1200字
第11回	私の好きな有名人	行きつけの店	説明文	
第12回	写真と動画	過去と未来	意見文	

2024年12月時点で、中国語（簡体字）圏8大学と、中国語（繁体字）圏2大学、ベトナム語

圏2大学の12回の調査が完了している。

現在調査未完了の大学のデータを使用することはできないため、本研究ではまず、Aテーマで執筆しているベトナム語圏1大学の12回調査すべてに参加している24名の学習者のデータを用いる。それに加えて、中国語（簡体字）圏6大学から同じくAテーマで執筆した学習者をランダムに24名抽出し、計48名の576本の作文を本研究の対象とする。このような比較研究を通して、中国語話者・ベトナム語話者における使用実態と習得の特徴をそれぞれ考察する。具体的には、中国語話者24名とベトナム語話者24名の大学1年から大学4年までに執筆した作文から、すべての受身、使役、受身使役を抽出し、考察していく。

### 3.2 分析観点

本研究はまず質的観点から考察を試みる。次の2つの観点から分析を行う。

【分析観点①】：中国語話者とベトナム語話者のヴォイス習得において、それぞれどのような共通点と相違点があるか。

本研究の主要な目的は、中国語話者のヴォイスにおける習得過程を考察することであるが、他言語母語の学習者の習得過程と比較することは不可欠である。他言語母語の学習者との異同を分析しなければ、それが真の中国語話者の特徴であるとは言えないからである。

【分析観点②】：同じ学習者が大学4年間の中で、ヴォイス表現においてどのような縦断的発達を見せるか。

「日本語学習者縦断作文コーパス (W-CoLeJa)」では、学習者に毎年同テーマの内容で執筆を繰り返してもらっている。そこで、4年間にわたって産出された学習者の作文を追跡し、4年間の成長と変化を可視化していきたい。

上記の2つの観点を踏まえ、第4節では中国語話者とベトナム語話者の相違点を考察し、第5節では両者の共通点について論じる。

## 4. 中国語話者とベトナム語話者における異なるタイプの誤用

中国語話者とベトナム語話者は、ヴォイスの使用実態、特に誤用のタイプにおいて異なる特徴を示す。総じて、中国語話者は特に初級段階において受身文をほとんど使用せず、その代わりに無情物主語他動詞文を多く産出する傾向がある。また、「(ら) れできる／(ら) れられる」、「(さ) せできる」といった特殊な形式の誤用も見られる。

次節では、4.1 および 4.2 において中国語話者特有の誤用について考察し、4.3 においてベトナム語話者特有の誤用を論じる。

### 4.1 中国語話者における無情物主語他動詞文の過剰使用

中国語話者は、特に初級段階において、以下の例(1) および例(2) に示すような無情物主語他動詞文を過剰に使用する傾向が観察される。

- (1) お出身は普通な田舎の家庭ですから、彼女の強靱な性格を育成しました。  
(CCE007A<sup>2</sup>, 1 年次作文)
- (2) 私は先生からプレゼントをもらった時、幸せと喜びが私を包んだ。  
(CCE007A, 3 年次作文)

例 (1) および例 (2) では、受身文が適用されるべき場面で使用されず、代わりに無情物主語他動詞文が用いられている。このような表現の使用は、中国語話者、特に初級段階の学習者に多く見られる。一方、ベトナム語話者にはこのタイプの表現の使用はほとんど観察されない。このことから、中国語話者、とくに初級段階の学習者においては、受身文を回避する傾向が顕著であることが示唆される。

この傾向は、杉村 (2019) の指摘する中国語話者は母語の影響により、受身の形よりも他動詞を多用する傾向があるという見解と一致する。多くの学習者は、学習の初級段階でこの問題に気づき、自己修正を経て正しい表現を産出できるようになる。しかし、例 (2) のように、3 年次になっても改善が見られないケースも存在する。

この現象は、やはり杉村 (2019) の言うように、中国語母語の影響によるものと考えられる。中国語では、日本語と異なり、人名詞を主語とする制約が弱く、無情物名詞が他動詞文の主語となる構文が許容される。そのため、このような文構造の影響を受け、例 (1) および例 (2) のような誤用が生じたと推測される。また、例 (2) のように、適切なインプットが得られない場合、3 年次になっても誤用が修正されないケースもある。

#### 4.2 中国語話者による「(ら) れできる / (ら) れられる」形および「(さ) せできる」形の産出

まず、「(ら) れできる / (ら) れられる」形における誤用と、学習者による自己修正について考察する。

中国語話者の産出においては、受身のマス形の直後に可能を表す「できる」や「られる」が後続する「(ら) れできる」および「(ら) れられる」という形が特徴的に見られる。以下の「記録されでき (ます)」「観られできます」「残されられる」は、その具体例である。

- (3) 写真なら、平面的な記録を残す形式で、当時の動作や表情などはどれでも記録されでき、  
(CCA002A, 1 年次作文<sup>3</sup>)
- (4) 動画なら、立体的な記録を残す形式で、事情に関係がある原因ときっかけ、過程、結果は全部で記録されできます。  
(CCA002A, 1 年次作文)
- (5) 写真より音声はよく捕捉され、続く時間の間に発する状況は動的に観られできます。  
(CCA002A, 1 年次作文)

<sup>2</sup>「CCE007A」等の文字列は学習者に付与された ID であり、先頭の 3 文字は大学ごとに割り当てられた ID を示す。

<sup>3</sup> 大学 CCA では、第 2 回調査と第 3 回調査のテーマが入れ替わっているため、第 2 回のテーマは「写真と動画」、第 3 回のテーマは「私の好きな有名人」である。

- (6) 代わりに、動画で記録すると、天気や気持ち、その思い出のあれこれもうまく残されらる。  
(CCE021A, 2年次作文)

上記は、「写真と動画」において見られた誤用の例である。例(3)では、「当時の動作や表情などをどれでも記録することができる」、あるいは「当時の動作や表情などはどれでも記録される」という文を意図していると考えられる。しかし、受身に関する理解が不十分であり、さらに母語の影響を受けた結果、誤用が生じたと推測される。学習者の母語作文を確認したところ、上記の4つの文はいずれも中国語の「能被V」(直訳すると「Vされることができる」)に対応する表現であった。

中国語では、確かに「能被您记住我的名字是我的荣幸」(直訳:「～さんに名前を覚えられることができて光栄です」)のように、一つの動詞に可能と受身の2つの意味を同時に付与することが可能である。

この学習者 CCA002A の経年的変化に注目すると、初級段階、すなわち1年次の作文では、例(3)-(5)のような誤用が見られた。しかし、学年が上がるにつれて、この誤用は見られなくなり、学習者自身による自己修正が行われたと考えられる。

ここで、受身の産出の変化に着目する。学習者 CCA002A は2年次の作文において、例(7)のように、受身が修飾語として用いられる際の誤用が観察された。しかし、3年次になると、自己修正が行われ、例(8)のように正しい用法が産出されるようになった。

- (7) 絵のように見た時にもたらしたメモリーや想像に頼っているのではないのでしょうか。  
(CCA002A, 2年次作文)
- (8) 6年前の夏休みに放送された「麻辣变形计」というテレビドラマを通じて初めて彼女を知ったことは、  
(CCA002A, 3年次作文)

また、例(9)のように、3年次の作文では、いわゆる身体部位の慣用句に関する受身の誤用が観察された。しかし、4年次になると、それも自己修正され、例(10)のように正しい用法が産出されるようになった。

- (9) まるで暗闇に光が差し込むように心を打ったと思っているからだ。  
(CCA002A, 3年次作文)
- (10) 普段の小さなことでも、引き付けられたり、心が打たれたりすると思えばすぐにスマホを取り出し撮影する。  
(CCA002A, 4年次作文)

次に、「させる」のマス形に可能表現の「できる」が後続する「させできる」という誤用も、中国語話者にのみ見られた現象である。例(11)は学習者 CCC183A が3年次に産出した誤用の例であるが、4年次に進級すると、自己修正が行われ、例(12)に見られるように、正しい用法への変化が確認された。

- (11) そんな平凡のような老人は、「稲の下で涼む」「ハイブリッドコメを世界に覆う」という夢

を見て、それを実現させてきたのである。(CCC183A, 3 年次作文)

- (12) 例えば家族の集まりや友人との旅行で撮った一枚の写真は、その日の楽しさや幸せな気持ちを思い出させてくれる。(CCC183A, 4 年次作文)

「(ら) れできる / (ら) れられる」と「(さ) せられる」の形の誤用は、ベトナム語話者には見られず、中国語話者の特徴的な誤用タイプであると言える。今後、韓国、タイ、ヨーロッパのデータ収集が終了した後も、この種の誤用が他言語母語の学習者に見られるかどうかを考察していきたい。

#### 4.3 ベトナム語話者における「させる」形と「させてくれる」形の混同

ベトナム語話者の作文では、使役の使用が多く観察される点の特徴的である。さらに、誤用のパターンも興味深く、使役の過剰使用や「させてくれる」形の不使用による誤用が多く観察される。特に、これらの形の使い分けにおいて誤用が見られるケースが目立つ。

- (13) 二度に会ったとき、彼女がプレゼントをしてくれましてとてもびっくりさせました。(VVA031A, 3 年次作文)
- (14) 彼の歌のおかげで、困っているときや寂しいときなど、私の気持ちを落ち着かせるし、それに家族が一番大切なものだと感じさせます。(VVA031A, 3 年次作文)
- (15) この歌はとてもプロで素晴らしいだと思います。皆さんの日を楽にさせると思います。(VVA031A, 3 年次作文)
- (16) さすがの動画のだから、皆さんにその頃のことをはっきりと思い出させました。(VVA031A, 3 年次作文)

上記の例 (13) では、「びっくりした」が使われるべきところに、使役の過剰使用が見られる。また、例 (14)–(16) は「させてくれる」形の不使用に関する問題である。いずれも「させてくれる」形が使われるべきであるが、その知識が習得されておらず、誤用が生じていると考えられる。例 (13) のような使役の過剰使用の問題や、例 (14)–(16) のような「させてくれる」形の不使用の問題も、母語の影響を受けていると思われる<sup>4</sup>。このようなタイプの誤用は、中国語話者には見られないものである。今後、他の言語を母語とする学習者の誤用タイプについても考察していく。

#### 5. 中国語話者とベトナム語話者における共通点：使役受身の過剰使用

中国語話者とベトナム語話者に共通している点は、使役受身「させられる」の過剰使用である。今回使用するデータ数は少ないが、次の表 2 に、中国語話者とベトナム語話者それぞれ 24 名における使役受身「させられる」の出現数を示す。

<sup>4</sup>2 名のベトナム語ネイティブスピーカーに確認してもらった。

表2 中国語話者とベトナム語話者の3形式(受身, 使役, 使役受身)における使役受身の用例数

	中国語話者	ベトナム語話者
使役受身(割合)	9 (2%)	4 (1%)
3形式の用例数(合計)	472 (100%)	378 (100%)

過少使用の理由として、まず1つは、格変化などを含む使役受身自体が複雑で習得が難しいことが挙げられる。もう1つは、使役受身が表す意味には、しばしばマイナスのニュアンスが伴うことである。本プロジェクトの作文テーマは「うれしかったプレゼント」、「好きな有名人」、「写真と動画」であり、これらのテーマではマイナスのニュアンスを持つ使役受身形を使用する機会が少ないと考えられる。

## 6. 中国語話者とベトナム語話者における受身の習得過程の特徴

ここでは、中国語話者とベトナム語話者それぞれ1名の学習者を対象にしたケーススタディを通じて、学習者の習得における縦断的発達を考察する。

### 6.1 中国語話者における受身の習得過程

まず、中国語話者の縦断的発達について考察する。

表3 学習者 CCE007A の受身における習得過程

産出例	出現箇所(習得順序)	調査回	学年
(17) 彼女の強靱な性格を育成しました。	単文の述語	2	1
(18) 写真と動画は全部で思い出を残すと言われています。	連用修飾節複文の主節述語	3	1
(19) 博多の「トンダ」という祭りでパフォーマンスが撮影されましたので、	連用修飾節の述語	5	2
(20) 動画を見ると、多くのことを思い出すことができ、時間がリセットされたような気がする。	名詞修飾節複文の修飾部	9	3

CCE007A は、1年次の第2回の作文の際に、例(17)のような産出をしている。受身が使われるべき箇所では、それを使用できず、無情物主語他動詞文が使われている<sup>5</sup>。日本語を習い始めたばかりの頃は、複雑な構造の文を作ることができず、単文が多くなることが推測される。第3回の調査からは、それまで現れなかった受身の使用が観察され、文の構造もより複雑な複文で使用されるようになった。ただし、その使用は主節述語部にとどまっている。第5回からは、さらに日本語能力が発達し、連用修飾節の述語部にも使われるようになった。さらに、3年生の第9回調査では、名詞修飾節における使用も観察されるようになった。

以上のことから、CCE007A の受身の習得過程は、単文述語、連用修飾節複文の主節述語、連用修飾節の述語、名詞修飾節という順に進んでいったことがわかる。

<sup>5</sup> 4.1節でも述べたように、この結果は杉村(2019)と一致している。

## 6.2 ベトナム語話者における受身の習得過程

続いて、ベトナム語話者の縦断的発達について考察していく。

表4 学習者 VVA008A の受身における習得過程

産出例	出現箇所（習得順序）	調査回	学年
(21) だから彼は おおくのひとにあいられています。	単文の述語	2	1
(22) 私の19歳の誕生日。それは 私の心に深く刻まれて 思いでの日	名詞修飾節複文の修飾部	4	2
(23) ホアミンジはベトナムの音楽業界で彼女の感動的な 声と内面の強さで高く評価されている歌手の一人です。	名詞修飾節複文の修飾部	8	3
(24) 時間がたつとビデオがぼやけて携帯電話で表示され なくなります。	連用修飾節複文の主節述語	9	3
(25) 携帯電話やカメラで写真を撮られ、印刷してアルバ ムを作ることができます。	連用修飾節の述語	9	3
(26) 子供のころの写真もたくさん社写真にとられており、 両親は今でもそれを保管しています	連用修飾節の述語	9	3

学習者 VVA008A は、1年次の2回目の作文から受身を用い始めている。習得の順序としては、まず単文の述語での使用が観察された。その次に2年次から名詞修飾節での使用が見られたが、誤用を経て自己修正を行い、最終的に名詞修飾節での使用を身につけた。3年次の第9回作文から連用修飾節での使用が観察された。(24)は連用修飾節複文の主節述語における使用であり、適切な表現となっている。(25)および(26)は連用修飾節の述語における使用例であり、(25)は誤用、(26)は正用であるが、この時点においては正用がまだ定着していないことが明らかである。このことから、中国語話者とは異なる習得過程を経て受身の使い方を身につけていることがわかる。

## 7. おわりに

本研究では、受身と使役、使役受身の3形式を取り上げ、中国語話者とベトナム語話者の比較を通して、それぞれの使用実態と習得過程を考察した。その結果、次のことがわかった。

まず、使用実態に関しては、中国語話者は母語の影響を受け、特に初級段階で受身が使われるべきところに、無情物主語他動詞文を使う傾向が見られた。

また、ベトナム語話者には見られない特殊な「～(ら)れできる／～(ら)れられる」と「(さ)せできる」の形式が観察された。これもやはり母語の影響を受けているため、このような誤用が生じていると考えられる。

ベトナム語話者においては、初級から使役の過剰使用や、「させてくれる」形の不使用といった問題が特徴的である。

次に、学習者の受身における縦断的発達を見てみると、中国語話者とベトナム語話者は異なる習得過程を経て、受身の使用を身につけている可能性が高い。

なお、今回の調査で使用したデータは、中国語（簡体字）圏の6校の一部のデータとベトナム語圏の1校のデータのみである。今後、タイ・韓国・ヨーロッパのデータ収集が終了した後、そ

これらのデータも加えて分析を行っていく予定である。

また、今回の考察は質的な分析にとどまったが、今後はデータを増やし、アノテーションを行い、量的観点からも考察を進める予定である。

## 参考文献

- 安藤貞雄 (1994) 「日英語対照研究 (1) 日英語の使役文—意味と構造と照応」『英語青年』140(1): 28-30.
- 何月琦 (2022) 「中国語母語話者による第二言語としての受身構文の習得：学習者コーパスをデータとして」博士学位論文。名古屋大学.
- 金秀珍 (2013) 「漢語動詞の習得から見る言語転移の可能性—韓国人日本語学習者を中心に—」『日本語学研究』37: 3-16.
- 杉村泰 (2019) 「日本語の自動詞・他動詞・受身の選択—日韓中母語話者の比較—」澤田治美・仁田義雄・山梨正明 (編) 『ひつじ研究叢書〈言語編〉場面と主体性・主観性』615-637. 東京：ひつじ書房.
- Soga, Matsuo (1970) Similarities between Japanese and English verb derivations. *Lingua* 25(3): 268-290.
- 田中真理 (1996) 「視点・ヴォイスの習得—文生成テストにおける横断的及び縦断的研究—」『日本語教育』88: 104-116.
- 田中真理 (1997) 「視点・ヴォイス・複文の習得要因」『日本語教育』92: 107-118.
- Tanaka, Mari (2005) The preliminary study on acquisition order of viewpoint-related voice in Japanese as a foreign/second language. In: Masahiko Minami, Harumi Kobayashi, Mineharu Nakayama and Hidetosi Sirai (eds.) *Studies in Language Sciences 4: Papers from the Fourth Annual Conference of the Japanese Society for Language Sciences*, 205-226. 張蘇 (2015) 「中国人学習者の日本語受動文の習得研究」博士学位論文。東北大学.
- 外崎淑子 (2016) 「ベトナム語母語話者の日本語使役表現・受身表現の習得について—中間言語形成の要因を明らかにするために—」『東海大学紀要国際教育センター』6: 1-20.
- 中島悦子 (2007) 『日中対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』東京：おうふう.
- 許明子 (2004) 『日本語と韓国語の受身文の対照研究』東京：ひつじ書房.
- 望月圭子 (2009) 「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析—中国語との対照から—」『東京外国語大学論集』78: 85-106.
- 森千枝見 (2006) 「日本語の第二言語習得研究における縦断的研究の意義—学習者の受身使用の分析から—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第2部文化教育開発関連領域』54: 189-195.
- 楊凱榮 (1989) 『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』東京：くろしお出版.
- 李偉 (2018) 「第二言語としての日本語の受身文の習得研究—視点に着目して」博士学位論文。大阪大学.
- Lee, Sang-su (2015) A focus-on-form in the Japanese teaching. *Journal of North-east Asian Cultures* 43: 269-284.

## Difficulties in the Use of Voice Among Japanese Language Learners: Evidence from the Written Corpus of Learner Japanese

WU Dan

Tokyo Metropolitan University / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

This study analyzes the usage and developmental processes of voice constructions in Japanese by Chinese and Vietnamese speakers, based on 12 longitudinal writing samples collected over four years from the Written Corpus of Learner Japanese (W-CoLeJa), which tracks learners from university admission to graduation.

The results reveal several key findings. First, regarding actual usage, Chinese speakers tend to be influenced by their native language, particularly at the beginner level, where they often employ inanimate-subject transitive sentences instead of passive constructions. Additionally, unique forms such as “~(ra)re dekiru / ~(ra)re rareru” and “(sa)se dekiru,” which are not observed among Vietnamese speakers, were identified. In contrast, Vietnamese speakers exhibit a tendency to overuse the causative form from the beginner stage and often confuse the “saseru” and “sasete kureru” constructions.

Furthermore, an analysis of the longitudinal development of passive voice usage suggests that Chinese and Vietnamese speakers acquire passive constructions through different developmental trajectories.

**Keywords:** W-CoLeJa, passive, causative, Chinese speakers, Vietnamese speakers